HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	公冶長故事考
Author(s)	渋谷, 瑞江
Citation	北海道大學文學部紀要, 44(1), 67-94
Issue Date	1995-08-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33655
Type	departmental bulletin paper
File Information	44(1)_PR67-94.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

公冶長故事考

渋谷瑞江

1 『論語』の中の公冶長

『論語』公冶長第五の冒頭に登場する公冶長という人物は、鳥のことばを解する人物としていろいろな所に登場するが、人となりについては謎の部分が多い。姓が公冶、名が長、字は子長というのが今日とられている説だが、異論もある。出身地についても、『史記』では斉人とするが、『孔子家語』では魯人としている。[1] 孔子の弟子であり、また女婿となった人物としては『論語』中でのその記述は簡単そのものである。「子謂公冶長、可妻也、雖在縲紲之中、非其罪也、以其子妻之」(孔子は公冶長を評して言った。公冶長は娘とめあわせるべきである。罪人として黒い縄でつながれていたが、それは無実の罪であった。私の娘の婿にしてよい人間である。)『論語』に登場する公冶長はたったこれだけの情報しか提供してくれない。

『十三経注疏』におさめられた北宋初期(十世紀末)の邢昺の『論語正義』をはじめ、ほとんどの注釈書は、公冶長が獄につながれたわけを語ってはいない。それらの中で梁(六世紀前半)の皇侃の『論語義疏』だけが、これを語っ

ている。今では逸書となってしまった『論釈』という書からの引用として、こう語っている。

公冶長が衛から魯に帰る途中、国境で鳥がこんな話をするのを聞いた。「清渓に行って死人の肉を食べよう」。ほどなく道のまん中で泣いている老嫗に出会った。公冶長がわけを尋ねると、嫗はこうこたえた。「息子が昨日出ていったきり、今日になっても帰ってこない。死んでしまったにちがいないが、どこにいるのかわからない」。公冶長が言った。「さっき聞いたんだが、鳥が『清渓に行って死人の肉を食べよう』と言いあっていた。もしかしたら婆さんの息子じゃないかね」と。嫗が行ってみると、まさしく息子だった。息子はすでに死んでいた。嫗は村役人に訴えた。役人が嫗にたずねた。「いったい、どうしてそのことが分かったんだね」。嫗は「公冶長に会ったらこう言っていたから」とこたえた。役人は「公冶長が殺していないのなら、どうしてそんなことを知っているんだ。捕らえて調べろ」と言い、公冶長は投獄された。獄主が「どうして人を殺したりしたんだ」と問うと「鳥のことばが分かるだけで、人殺しはしていない」と公冶長はこたえた。獄主が言った「それでは試してみよう。もしほんとうに鳥のことばが分かるのなら釈放しよう。そうでなければ死をもって償うのだ」。公冶長は獄に六十日間留められた。最後の日、獄の柵の上で雀がチュンチュン鳴き交わしていた。公冶長はほほえんだ。獄吏は「公冶長が雀の鳴声に笑っています。鳥語が分かっているのではないでしょうか」と獄主に報告した。獄主は獄吏に「雀が何と言ったから笑ったのか」と尋ねさせた。「雀がチュンチュン鳴いて『白蓮水のほとりで、車がひっくり返って黍粟があたりにばらまかれ、雄牛は角を折ってどうもこうもない。つっつきに行こう』と言ったので笑ったのだ」と公冶長はこたえた。獄主はこのことを信じないで、見に行かせた。果たしてそのとおりだった。その後、さらに燕と豚のことばも解した。何

度もこういうことがあったので釈放された。[2]

このはなしに対しては、引用している皇侃自身が「これは雑書から出たもので信じるにたりない。公冶長が鳥語を解するというのは、古い言い伝えを記したものだろう」と、否定的な眼でみている。このように『論語』の本流からは外れている公冶長のはなしだが、なにがしかの印象を人々に与えてきたに違いない。『論語集釋』を著した楊樹徳はこの公冶長の説話を漢魏小説を伝えるものとして重視している。[3] また民間文学の研究者の袁珂は「孔子の門弟のうちで最も興味深い」「神話的な要素が最も濃厚」と、その著作の中でたびたび言及している。[4] 日本でも安井息軒が『論語集疏』で「好事者の偽撰である」と内容は否定しながらもこれに言及している。諸橋轍次も「論語人物考」で公冶長のはなしを取り上げ、やはり「単なる伝説に相違ない」と評している。また「論語人物考」の付録にあたる「論語に関する故事逸話」では、後で取り上げる明代の筆記『留青日札』の中の公冶長のはなしを引用している。[5] 吉川幸次郎は朝日文庫版『論語』で、公冶長と鳥語に関する記述はわずかなものの、皇侃の『論語義疏』に関して「何晏以後、彼の時代に至るまでの学者の説も引用されており、甚だ面白い説に富むが、引用された説、彼自身の説、いずれも老荘による歪曲や、その他の原因のために、面白すぎる場合がある。」と評している。[6] また、柳田国男も随筆の中で公冶長に触れている。[7]『論語』の中での存在感は稀薄だが、なにがしか印象を与える人物であったということはできそうだ。

もちろん中国の古典の中には、公冶長のほかにも鳥語または鳥獣の言語を解する人物が登場する。比較的名の知られた人物として、春秋時代の介葛盧、漢代の楊翁仲、楊宣、三国時代の管輅などがいる。

介葛盧は東の辺境、介国の王で『春秋左氏伝』僖公二十九年に登場する。彼は牛の鳴声を聞いて、その牛が生んだ

三頭の仔牛はみな犠牲に用いられたことを解したという。孔穎達の疏には、夷狄の特性として鳥獣の言語を解するという解釈がみられる。介葛盧は公冶長と並んで鳥獣の言語を解する人物として最も頻繁に目にする人物である。楊翁仲は広漠の人で『論衡』巻二十六「実知篇」に登場する。馬の鳴声から、二頭が互いに「蹇（のろま）」「眇（すがめ）」と罵りあっていたことを解したという。楊宣は『漢書』に名前は見えるが鳥語のことには言及されていない。『太平広記』で、晋代に編まれた『益都耆旧伝』を引いて、雀の鳴声から車がひっくり返って粟がばらまかれていることが分かったというエピソードが紹介されている。管輅は『三国志・魏書』巻二十九「方技伝」に登場する。屋根の上のカササギの鳴声から、東北の方角に住む女が夫を殺し、死体を西の家に持っていって罪をかぶせようとしていることを言い当てたという。

しかし、これらの話はどれも断片的なエピソードといった観が強く、公冶長のようにストーリー性を持ち、後世でさまざまな変化を見せたものはないようだ。以下、公冶長がどのように描かれていくのかを時代を追って見ていきたい。

2　唐詩の中の公冶長（唐代の公冶長）

次に公冶長が登場するのは、唐詩の世界である。高級官僚としての詩人たちには、栄華のすぐ隣に、讒言・左遷、ひどいときには投獄という事態がひかえていた。そんな不遇の立場に立たされたとき、公冶長のはなしは何とぴったりなことだろう。いく人かの詩人が、公冶長を詠んでいる。[8]『白氏六帖事類集』[9]にも載っているので、詩語として認め

られていたといっていいだろう。自らが投獄されたときのことを描いた沈佺期と劉長卿の詩をみてみよう。

同獄者歎獄中無燕　同獄者獄中に燕なきを歎く　（沈佺期）
何許乗春燕　何許（いずこ）にか春燕乗（のぼ）る
多知弁夏台　多知にして夏台を弁ず
三時欲併盡　三時併せて盡きんと欲するも
双影未嘗来　双影未だ嘗て来たらず
食芯嫌叢棘　芯を食しては叢棘を嫌い
銜泥怯死灰　泥を銜んでは死灰に怯える
不如黄雀語　如かず黄雀の語の
能雪冶長猜　能く冶長の猜を雪ぐに

春燕はどこへ飛んでいってしまったのだろう／物知りの彼らにはここが牢獄であることがわかるのだろう／三つの季節が過ぎようとしているのに／そのつがいの翼の影はまだ見ていない／巣づくりに枝を啄めば棘があり、泥を啄めば死者の灰であることを嫌がっているのだろう／黄雀のことばが公冶長の疑いを晴らしたことにはかなわないものだ

罪所留繋毎夜聞長洲軍笛声　罪所に留繋され毎夜長洲軍の笛声を聞く　（劉長卿）

白日浮雲閉不開　白日浮雲閉じて開かず
黄沙誰問冶長猜　黄沙誰か冶長の猜を問わん
只憐横笛関山月　ただ憐れむ横笛の関山の月を
知処愁人夜夜来　知んぬ愁人の夜々来たるを

空を覆う雲は一日中切れることなく／黄沙舞う中、公冶長の猜を問う人もない／ただ関山の月の曲を吹く横笛の音を聞くだけだ／夜ごと故郷をおもう人の笛の音が聞こえてくる

沈佺期は初唐の人で、長安四（七〇四）年に賄賂を受けたことにより投獄され、さらに神龍元（七〇五）年には親交のあった張易之の事件に連座して驩州に流された。一方劉長卿は盛唐の人で、至徳二（七五八）年に当時みずからの任地であった蘇州の長洲県で投獄されている。二人とも公冶長の気分を充分に追体験したわけである。他に公冶長を詠んだ詩人たちも、多かれ少なかれ宮仕えと左遷を経験している。この時代一度も左遷を経験せずに任期を全うした高級官僚はどれ程の割合だったのだろうか。おそらく非常に低い率だったのではないだろうか。しかしそれにしては、公冶長の出現頻度はさほど高くはなく、また有名どころの詩というわけでもない。それでもここに登場する公冶長は、鳥語と無実の証明との関連を表現する、いわばエッセンスといえるだろう。

唐代にはまた「伝奇」というジャンルもあったが、この中ではまだ公冶長を捜しあてていない。一方、仏典の中には公冶長の名を冠してはいないが、鳥語を解する男のはなしがみられる[10]。

3　小説・筆記・地方志の中の公冶長（明・清の公冶長）

唐代の詩に現れた公冶長を再び見つけたのは、明代の筆記（随筆）や小説・地方志の中である。唐から明の間をつなぐものはまだ見つかっていない。ここでの公冶長の探索もこれからの課題の一つである。明代の資料もさほど多く集められなかったが、それぞれに類似点と相違点があるので、それらの概略を見ていきたい。

まず筆記では田芸蘅の『留青日札』巻三十一に「黄雀語」という一文がある。(11)

A

公冶長が貧乏で食い詰めていたころ、雀が飛んできてこう言った。「公冶長、公冶長、南山で虎が羊を引きずっている。あなたは肉をわたしははらわたを食うことにしよう。早く行って、ぐずぐずしないで」。子長［公冶長の字―筆者注］は言われたとおり、羊を取ってきて食べた。その後、羊の持ち主が角を見つけた。これは盗みだと魯君に訴えた。魯君は鳥のことばのことを信じないで、捕らえて獄につないだ。孔子はこのことを以前から知っていて、魯君に申し開きをしたが、やはり許されなかった。そこで「たとえ獄につながれても、罪ではない」と嘆いた。それからほどなく獄中の子長は、ふたたび雀が飛んできて「公冶長、公冶長、斉が軍隊を出してわが国の国境を侵そうとしていいる。沂水のほとり、嶧山のふもと。ぐずぐずしないで防御して」と鳴くのを聞いた。子長は獄吏を通じて魯君に奏上したが、またしても信じてもらえなかった。しばらくしてそこへ行ってみると、斉の軍勢がまさに侵攻しようとしていた。すぐさま兵を発して応戦し、大勝した。そのため公冶長を釈放し、大夫の爵位を与えようと

したが、辞退した。鳥のことばで禄を得ることを恥じたためである。

この後で楊宣のことにも改めて言及している。したがって芸蘅は、公冶長に覆菜のモチーフを使わなかったと思われる。そのかわり、斉という一国を救うという壮大なはなしになっている。

地方志に記された公冶長は、『古今図書集成』の引用文からのものである。「禽虫典四十・雀部外編」に引かれた、青州府志のもの。青州は現在の山東省益都県。(12)

B

公冶長は百の禽語を話すという言い伝えがある。それに言う。

「そのころ一羽のミミズクがやってきて、『公冶長、公冶長、南にノロの死体がある。あなたは肉を食べて、わたしにはそのはらわたを下さい』と告げた。公冶長がそこへ行ってみると、はたしてノロがいた。はらわたをくれる気がないのを見て、ミミズクはこれをうらみに思った。またミミズクがやって来て、前のように告げた。また行ってみると、数人の人たちが何かをとり囲んで騒いでいた。公冶長はてっきりノロの死体だと思い、他人に横取りされまいと、遠くからさけんだ『おれが殺したんだ』と。行ってみると、それはノロではなく人間の死体だった。人々は公冶長を捕え、県知事にさし出した。知事の尋問に、公冶長はそのわけを話したが、知事は信じなかった。その時、雀がけたたましく鳴いたので、知事は公冶長に『鳥のことばが分かるというのなら、ここに来てうるさく鳴く

雀はいったい何と言っているのだ』とたずねた。公冶長は、しばらくそれを聞いて、『雀は、東の村に粟をひっくり返した車があるから、皆で行ってつっつこうと言っております』と答えた。人をやって調べさせるとはたしてその通りだったので、釈放された。」

小説に描かれた公冶長は、『三宝太監西洋記通俗演義』という鄭和を主人公とした章回小説の中に出てくる。航海中、鳥のことばが分かる者を募った場面で、それに応じた王明という兵士が自らの能力をアピールしている部分である。[13]

C

ある日、公冶長は二人の姨夫（おじ）と世間話をしていた。その時、一羽の鳥がさえずるのを聞いた。公冶長は言った「おじさん、しばらくお待ちください。私が羊をつかまえて来ます。羊肉麺を作りますから、召し上がっていってください」しばらくすると、一頭の肥えた羊を引いてきて、羊肉麺を作り、二人のおじにふるまった。「あなたは、この羊をどこから連れてきたのですか」とたずねると、公冶長は「先ほどの鳥が私に教えてくれたのです」と答えた。「どのようにして、鳥があなたに教えてくれたのですか」「あの鳥はさえずって『公冶長、公冶長、南山のふもとに羊が一頭いる。あなたは肉を、わたしははらわたを食べよう』と言ったのです。これでも鳥が教えてくれるはずはないと言うのですか」。おじは「こんな不思議なことがあるのも、あなたは鳥のことばが分かるからなのですね」と納得した。しかし件の鳥は、はらわたがもらえなかったことをうらみに思っていて、ある日再びやって来てこう言った「公冶長、公冶長、北山のふもとに羊が一頭いる。あなたは肉を、わたしははらわたを食べよう」公冶長は急ぎ

北山へ行くと、そこには人間の死体が一つあるだけだった。土地の人々は公冶長が殺したのだと訴えた。公冶長は三年あまり獄につながれた。このため孔子はこう言った「公冶長は、獄につながれていたとはいえ、罪ではない（飛其罪）」と。孔子の言った「飛」の字は、鳥が公冶長を陥れたことを言っている。それは天から降ってきた罪である。

この後に「わたしの鳥語を解する能力は公冶長に勝るとも劣らない」と続く。

以上三つのはなしは、公冶長を主人公として鳥のことばがわかるために誤解を受けて獄に繋がれるというモチーフを共通とするが、細部はみごとに違っている。いずれも時代的には明代の嘉靖から万暦の間に成立したと考えられるが、書き手（Bは語り手とその記録者）の違いは内容の違いでもあることを表している。中国の知識人の学習方法というものが、ひたすら暗記にあったこととも関連するのかも知れない。骨組みはしっかり記憶しているが、細部にはしばしば異同が見られるのは、いわば中国古典の引用の特徴ともいえる。そしてここでは獄に繋がれる原因が語られるようになった。それは鳥との約束を果たさなかったためだった。公冶長はここに来てだいぶ人間くさくなったようだ。かわりに『論語義疏』に登場した老嫗は消えてしまった。さらに結末の部分では覆粟のモチーフに、一国を救うモチーフが加わった。

国を救うということに関しては、南方熊楠が「戦争に使われた動物」の中で、「獣や魚や虫等も戦争の卜（うらない）に用いられたが、鳥類が最も多く用いられた。支那やインドその他に鳥語を解した人の譚（はなし）多きは、鳥卜が盛んに行われた証（しるし）である」[14]と述べている。公冶長のはなしの中にも、このような習俗の断片があるのかもしれない。

また、ひとつの完結した物語の形を取ってはいないが、公冶長のはなしと唐代の詩との関連について述べている明

代の随筆[15]や、公冶長の名が見える清代の絵入りのかわら版[16]がある。

4　民間説話の中の公冶長（今に生きる公冶長）

数の上では、ここに最も多くの公冶長が登場する。ただし身元のはっきりしない公冶長が増える。遼寧省、山西省、湖北省、浙江省紹興で収集されたはなしの概略を見てみたい。

D　公冶長的故事（遼寧省撫順県[17]）

公冶長という人がいて、いろいろな鳥のことばに通じていた。ある日烏が「公冶長、公冶長、南山に羊がいる。あなたは肉を食べ、わたしにははらわたを」と鳴き、羊を手に入れた公冶長ははらわたまですっかり食べ尽くしてしまった。烏はこれをうらんだ。再び烏は「公冶長、公冶長、東の大通りに羊がいる。あなたは肉を食べ、わたしははらわたを食べる」と、公冶長によびかけた。しかしそこにいたのは羊ではなく、人間の死体だった。彼は「おれがやったんだ」とさけびながら走っていくと、犯人を探していた役人に捕まってしまった。知事の尋問に、烏のせいだと弁解するが聞き入れてもらえなかった。その時、雀の群れが飛んできてひとしきり囀り、また飛び去った。知事が何と言っていたのかとたずねると、公冶長は「西の方で粟を積んだ車がひっくり返っているから、つっつきに行こうと言っていました」と答えた。調べさせるとその通りだった。その時、今度は燕の群れが飛んできて囀った。知事の問いに「知事の息子が自分の息子を引き出しの中に閉じ込めていると言っています」と答えた。息子を

連れてきて問い質すと、息子はこれを認め、燕の子を放してやった。これらのことから知事は、公冶長が鳥語を解することは真実だとして釈放した。

遼寧省にはほかにも公冶長のはなしがあり、Aと同じ国難を救う結末のもの（同じ撫順県）と、後出のしょっぱい・甘いで無罪を証明する結末のもの（清原県、露天区、望花区）が紹介されている。

E　鳥語（山西省臨汾）[18]

かつて弓冶長という人がいて、各種の鳥のことばを解した。ある朝、畑仕事をしていると一羽のカササギが飛んできて「弓冶長、弓冶長、南山に豚と羊がいる。あなたは肉を食べ、わたしははらわたを食べる」と言った。弓冶長が若者数人とともに行ってみると、死んだ豚と瀕死の羊がいた。これはイノシシが捕まえたものを、カササギの鳴き声に驚いて置いていったものだった。弓冶長と仲間は肉を分けあって持ち帰り、はらわたは地面に埋めてしまった。カササギはこのことをうらみに思った。数日後、再びカササギがやってきて「弓冶長、弓冶長、東山に黒山羊がいる。あなたは肉を食べ、わたしははらわたを食べる」と言った。弓冶長はカササギのうらみをかっていたので、信用せずに、まず見に行ってみた。そこには黒い服を着た人の死体があるだけだった。弓冶長はびっくりして、きびすを返したが、捕えられ役所に連行された。役人の尋問に、弓冶長は人は殺していないと言った。役人はいったいそこで何をしていたんだと聞いた。弓冶長はカササギのことを話した。役人は、炊いた飯の中に大量の塩を入れて広い場所に撒かせた。ほどなく鳥の大群がやって来て、あっというまに飯粒をたいらげ、ひとしきり鳴きかわし

てから飛んでいった。役人は弓冶長に何と言っていたのかと聞くと、「米はうまかったが、たいそうしょっぱかったと言っていた」と答えた。役人はこれを聞いてすぐ釈放した。弓冶長は家へ帰ると、飯を炊いて庭にまいた。すぐに鳥の大群が飛んできた。食べおえると鳥たちは弓冶長にお礼を言った。そこで弓冶長と鳥は仲直りし、友達となった。

ある日、弓冶長が柴を刈っていると鳥の群がやって来て「地震だ、早く逃げろ。地震だ、早く逃げろ」と告げた。弓冶長は村人を連れて山の上に避難した。午後、大雨が降り、大水が出た。夜、空に一筋の光が走ると、地は裂け、山は崩れ、村は大きな池になってしまった。人々はずっと山の上に住むことになった。この鳥の恩を忘れないために、人々は金を出し合って鳥王廟を建て、大きな鷹の像を作った。毎年七月一日を鳥節と定め、まつりを行っている。

このはなしでは、公冶長の名前が弓冶長となっている。おそらく音の類似によるものと思われるが、採集が比較的新しい（一九八七年）ためもあり、公冶長という人名が『論語』に由来するという意識がなくなってきたためであろう。また災害を予測するというモチーフが加わり、鳥を祀ることへとつながってもいる。

F　鳥が鳴くのは不吉なことであることの由来（湖北省谷城区）[19]

春秋戦国時代に公冶長と呼ばれる文人がいて、鳥語を解した。森の中で鳥の歌を聞いていると、一羽の烏が飛んできて「公冶長、公冶長、南山で狼が羊を引きずっている。早く行って、でも慎重に！　あなたは肉をわたしはは

らわたを。はらわたは木の枝に引っかけておいて下さい！」と言った。南山に駆けつけると、はたして狼が羊を引きずっていた。公冶長は羊を奪って帰り、これを食べた。しかしはらわたを木の枝にかけて烏に与えることを忘れてしまった。烏はおおいに不満だった。再び烏が飛んできて「公冶長、公冶長、南山でまた狼が羊を引きずっている。早く行って、でも慎重に！　あなたは肉をわたしははらわたを。はらわたは木の枝に引っかけておいて下さい！」と言った。南山に行ってみると、そこには強盗に殺された人間の死体があるだけだった。役人がやって来て彼を役所へ連行した。県知事はなぜ人殺しをしたのかとたずねた。彼は烏に陥れられたのだと答えた。県知事はこれを聞いて大笑いしてこう言った。「おまえはよくもでたらめが言えるものだ。どうして烏の言うことが分かったりするというのだ」。公冶長は「わたしは烏だけでなくあらゆる獣や鳥のはなしを理解することができます。どうか試してみて下さい」と言った。県知事はこれを信じなかった。ひそかに役人に命じて、大量の塩を入れた飯粒を雀に与え、公冶長を連れてきて雀のはなしを聞き分けさせた。「雀はしょっぱい、しょっぱいと言っていました」と答えた。まだいくらか疑問を抱いていた県知事は、今度は大量の砂糖を入れた飯粒を鶏に与え、公冶長に聞き分けさせた。「鶏はあまい、あまいと言っておりました」という答えに県知事は深くうなずいた。このようにして、彼は烏語を解することを証明した。このことが伝わって以後、人々は公冶長が獄につながれたのは、烏に陥れられたためだということを知るようになった。そして、烏が鳴くのは不吉な知らせだと思うようになった。

G　公冶長（紹興[20]）

公冶長という狩人がいて、鳥語を解した。狩りの帰りに山のふもとを歩いていると、空の上からトンビがこう言っ

た。「公冶長、公冶長、山の後ろに羊を引きずった虎がいる。あなたは肉を食べ、わたしははらわたを食べる」。行ってみると、虎が羊を食っていた。虎に向けて鉄砲を撃つと、虎は逃げた。羊を背負って帰り、料理して食べたが、はらわたはこえだめに捨ててしまった。トンビはこれに腹をたて、再び狩りから帰る公冶長に「公冶長、公冶長、山の後ろに羊を引きずった虎がいる。あなたは肉を食べ、わたしははらわたを食べる」と言った。公冶長が行ってみると、死体が一つあるだけだった。公冶長はきびすを返して家に帰った。その頃、役所では殺人犯を捜していた。死体の傍らに特大の足跡があり、それは公冶長のものだというので、役所に連行されて取り調べを受けた。公冶長は「人は殺していない。わたしは鳥のことばが分かるので、トンビにだまされたのです」と弁解した。役人はこれを信じなかった。公冶長が鳥語を解するかどうか試そうと、木の又に一つはあまく、一つはしょっぱい食物を置いた。一群の鳥が飛んできて、鳴きながら食べはじめた。公冶長はこれを聞いて、あまい、しょっぱいを言い当て、釈放された。

それから一年後、外国から一羽の伝書鳩が飛んできた。鳩の脚に結ばれた手紙には、これから一月後、この鳩を無事に送り返せば何事もないが、もし戻らなければ侵攻を開始すると書いてあった。王はこの鳩を養い始めたが、どんな餌を与えても食べなかった。日々やせ細り、元気をなくしていった。ある大臣が言った。「公冶長という者が鳥語を解するということです。呼んでみてはいかがでしょう」。公冶長の問いに鳩は、「まっかにおこった木炭を食べ、ぐらぐらの煮え湯で水浴びをしてやっと生きていくことができるのです」と答えた。一月後すっかり元気になった鳩は、約束通り故郷に帰った。隣国の王は、その国に知恵者のいることを知って、攻め入ることをあきらめたのだった。

北大文学部紀要

ここでの公冶長の身分は狩人となっている。そして前半は他と共通する筋のはなしだが、後半はこのはなしに特徴的なものとなっている。広く国難を救うモチーフの一つと考えることも可能かもしれない。紹興には、もう一つ次のような公冶長のはなしも伝わっている。

H 「鳥語通」の公冶長（紹興[21]）

春秋時代、公冶長という人がいた。様々な鳥語を解したので「鳥語通」と呼ばれていた。ある日、烏梢蛇と黄尾蛇が媾っているのを見て、スキの刃で打ちつけた。烏梢蛇はその場で死に、黄尾蛇は傷を負って逃げていった。黄尾蛇は実は蛇王の后だった。泣く泣く蛇王に公冶長のことを訴えた。「罪のない烏梢蛇の大臣を殺め、わたしも傷つけられた」と。蛇王は「何の罪もない大臣を殺め、妻までも傷つけるとは、ふとどきなやつ」と怒り、蟒蛇将軍を呼びつけると、公冶長を食ってしまうよう命じた。蟒蛇は公冶長の家にしのびこみ、そこで老母と公冶長が話しているのを聞いた。「世の中は乱れている。今朝がた烏梢蛇と黄尾蛇が媾っているのを見てしまった。惜しいことには、烏梢蛇をたたき殺せただけだったが…」蟒蛇はこの話を聞いて、どうも様子が違うと思った。もしその話が本当なら、公冶長は証人だから食うのはしばらくおあずけにしようと戻っていった。蛇王にこのことを報告すると、「たわむれか、不倫かまずはっきりさせなければならない」と、后に問いただした。后は命を落とすことを恐れて、大臣と密通していたと本当のことを白状した。王はこれを聞くと、怒って即座に后を殺してしまった。公冶長が烏梢蛇を殺したのは、罪ではなく手柄だったのだ。蛇王は蟒蛇に命じて、后の肉を公冶長に食べさせた。それは食べると鳥語のすべてを解することができるようになる宝だった。

ある日の夜明け、烏が「公冶長、公冶長、山に羊を引きずった虎がいる。あなたは肉を食べ、わたしははらわたを食べる」と鳴いた。行ってみるとはたして虎に殺された大きな羊がいた。喜びいさんで背負って帰り、料理した。肉はもちろんはらわたも食いつくしてしまい、烏にやることなどすっかり忘れてしまった。数日後、再び烏が「公冶長、公冶長、山に羊を引きずった虎がいる。あなたは肉を食べ、わたしははらわたを食べる」と鳴いた。公冶長は、また羊の肉にありつけると喜んで山に向かったが、そこには死体が一つあるだけだった。公冶長は、はらわたを食えなかった烏の仕返しだとさとった。逃げようとしたその時、死人の親戚や友人たちがやってきて捕え、役人のところへ引ったてた。裁判の場で公冶長は烏語を解するようになったいきさつを話したが信じてもらえず、その場で試すことになった。公冶長には見えないように、二皿の米を用意させ一つには塩を、もう一つには砂糖をまぜ、軒先に置いた。やがて一群の烏が飛んできて、米をついばみ始めた。県知事が「烏語を解するというが、東の烏は何と言っているか」と問うと、公冶長は「しょっぱい白米、しょっぱい白米と言っております」と答えた。「西はどうだ」。「あまい白米、あまい白米と言っています」。「そのとおり」と県知事は喜んだ。公冶長には得難い才があると、この殺人事件をもう一度調べさせると、虎に咬み殺されたことが明らかになった。県知事は上奏して皇帝に公冶長を推挙した。皇帝は公冶長を「烏語通宮廷侍郎」に任じた。

このはなしは、後半はGのものとだいたい同じだが、前半の蛇の肉によって能力を得るモチーフは全く別物である。これは後出の中国の少数民族や、遠くはグリム童話とも関連しているものである。

以上、今も生きる公冶長を五人ほど見てきたが、『論語義疏』の公冶長とはだいぶ隔たってしまったようだ。ここでは『論語』との関連が語られたものは一つもない。最も近い表現でFの「春秋戦国時代の文人」であり、他は畑仕事をしたり、狩人だったりする。ここにいる公冶長はすでに『論語』に住んでいた彼とは別人のようである。千年を超える長い時間に中で徐々に変化してきたのだろう。「公冶長」という名と鳥語という核の部分は残しているものの、それを包む外側の部分にはさまざまな表現が出てくる。おそらくそれぞれの地方に語り伝えられていたはなしと接触し、融合して出来ていったものだろう。しょっぱいあまいの味が決め手となって、鳥語を解することを証明するというモチーフなどはいかにも生活の場と密着したものだといえる。身元が不明になっていくにつれ、公冶長は身近な人になっていくようだ。語りによって伝えられたものの特徴ともいえるだろう。様々なものを呑みこみ、解体し、再構成してそれぞれの地方での公冶長が出来ていったのではないか。そしてそれは周辺へ、世界へと繋がっていくことにもなる。

5　公冶長故事と類似のモチーフを持つ韓国の昔話

崔仁鶴『韓国昔話の研究』のタイプインデックスによると、話型268に「聴耳と三つの呪宝」という昔話が紹介されている。この話は三つの部分によって構成されており、その一番始めの部分が、公冶長のはなしと類似したものになっている。(22)

鳥獣のことばが分かる若者（韓国）[23]

昔、とある村に鳥獣のことばが分かる若者がいた。病気の母がいてどんな薬を試しても良くならなかった。若者は薬を探しに山へ行った。薬を探して歩きまわり、深い谷まで入りこんでしまった。烏が鳴いてたので、こっそりと聞いてみると、「あっちに食べ物がある。あっちに食べ物がある」と言っていた。腹がすいていたので行ってみると、そこには、刃物で刺された男の死体があった。びっくりして、後も振りかえらず逃げた。しばらく走ると日が暮れてしまったので、とある家に一晩の宿を頼んだ。その家には女の人が一人いるだけで、何やら心配ごとがあるような様子だった。若者がたずねると、夫が市場へ行ってもう帰ってくるはずなのにまだ帰っていないということだった。若者は何の考えもなく、先ほど行き当たった死体の話をした。女の人はその話を聞くと、すぐにその場所へ行こうと言い、二人は松明を持って出かけた。女の人は死体を見ると、「これは夫です。あなたが殺してしまったのですね」と泣きさけんだ。そしてうらみをはらさなくてはと、若者を、郡主のもとへと引きたてた。郡主は女の人の言い分だけを聞いて、若者は人殺しに違いないと言った。若者は、自分は絶対に人殺しなどしてはいないと、烏のはなしのいきさつを郡主に訴えた。郡主は本当かどうか調べてみようと、燕の巣からヒナを取ってきて礼服の袖にかくした。すると母燕がやって来てさわがしくさえずった。燕は何と言っているのかと聞かれた若者は、「『肉も皮も毛も役にたたない小さな子をなぜつかまえたのか。お役人さま早く返してください。早く返してください』と言っています」と答えた。郡主はこれを聞いて、若者が本当に鳥語を解することが分かったが、もう一度試してみようと考えた。郡主の家の裏手に大きな木があり、そのてっぺんでいつも鶴が何事か争っていた。郡主は争いの原因を探るように命じた。聞いてみると、釣針が一本あって、それが誰のものかを争っているのだった。郡主が人

を木に登らせて調べてみると、確かに釣針が一本あった。郡主は若者は無罪であると判断し、釣針を与えて釈放した。

その後に、若者は猿から三つの呪宝を手にいれ、それをうまく使って王様の婿になるという筋の昔話である。母燕のことばを聞いて鳥語を解することを証明するモチーフは、4の中国の民間文学の中にも見られた（D遼寧省撫順県のもの）。鳥のことばに従って行ってみた先に死体があり、それを人殺しと誤解され、裁判にかけられるという筋も、中国の民間文学とほとんどパラレルな関係にある。しかし、そこには公冶長という特定の人物は登場しない。鳥語を解することによって無実の罪をきせられ、やはり鳥語で無実を証明するというストーリーの骨組みは共通するが、韓国のはなしには一人の人物にそれを仮託するという指向性は見られない。

朝鮮半島にはこのほかにも、鳥語を解することによって無実の罪を晴らしたはなしがある。[24]

6　鳥語を解する男のはなし

鳥語を解するはなしは世界中に広く分布している。公冶長のはなしを持つ漢族の隣に暮らす少数民族の中にもこういったはなしは見られる。なかでも、モンゴル族には蛇との関わりで語られる次のようなはなしがある。

狩人海力布（モンゴル族）[25]

海力布（ハイリフ）は、山の中でクロヅルに襲われた小さな白蛇を救った。翌日再び白蛇が現れて、自分は龍王の娘で、父母がお礼をしたいと言っているので一緒に来てくれという。そして父母が何かをくれると言っても、「何もいらない、ただ龍王が口にふくんでいる玉が欲しい」と答えるようにとハイリフに助言した。その玉はあらゆる動物のことばが分かるというものだが、そのことは決して他の人に言ってはならない。もしそれを他人に知られてしまうと、あなたは石になってしまうと注意を与えた。はたして、ハイリフは玉を手に入れた。それは狩りをするときに、とても重宝なものだった。

数年後、いつものように山で狩りをしていると、一群の鳥が「早く別の場所へ行かなければならない。明日このあたりの山が崩れ、洪水が起きてすべてが沈んでしまう」と話しているのを聞いた。ハイリフは急いで村に帰り、皆に早く避難するようにと言ったが、あまりに突飛な話なので誰も信じなかった。ハイリフは石になることを覚悟で皆にことのいきさつを打ち明けた。次の日、はたして洪水のためすべては沈んでしまった。村人はハイリフの自分を犠牲にして皆を救った功績をたたえて、石になってしまった彼を山の頂きに置いて祀った。ここが現在「ハイリフの石」と呼ばれる所だという。

蛇、あるいは蛇肉によって動物のことばを解する能力を得るはなしは、遠く離れたヨーロッパのグリム童話などにも見られる。[26] 早くはプリニウスの『博物誌』にも関連の記述が見られる。[27] そして4の漢族の民間文学でも、Hに登場する公冶長は蛇の肉を食べることによって鳥語を解する能力を得ている。蛇と鳥語の関係を媒介にして、公冶長はヨー

ロッパまでつながるというのは、乱暴すぎるだろうか。つながるとは明言できないにせよ一本の細い糸は存在するだろう。しかし、そこには大きな違いもある。中国（漢族）のものには、タブーの考えが出てこないことだ。Eの山西省のはなしとモンゴルのものとの比較でも明らかであるが、そこにはいかにも中国らしい、現実的な面を重視する傾向が端的に表れているような気がする。

公冶長と世界とのつながりで、もう一つ忘れてならないのは仏典である。2でもふれたように、唐代には公冶長の名を冠したはなしはまだ捜しあてていないが、仏典の中に鳥語を解するはなしがいくつか見える。注10で紹介したものは、断片的にではあるが、これまで見てきた各地のはなしとのつながりが見える。したがって、これらのはなしはもとをたどればインド起源のものと言えるだろう[28]。

そして鳥語を解する人間がいる一方、人語を話す鳥がいる。鸚哥（インコ）や鸜鵒（オウム）、九官鳥などは、中国やインドでもさまざまに記録されてきた。玄宗皇帝と楊貴姫に寵愛された「雪衣女」などは最も有名なものだろう。仏教故事の中にも、鸚哥や鸜鵒のはなしがいくつかある[29]。これらの鳥はお経を唱えたり、親孝行をしたり、籠から解放してもらった恩を忘れなかったり、なかなか立派に描かれている。人語を話す動物に人知では測れない何かを感じ、このような物語が生みだされて来たのだろうか。

さらに人間は、鳥の声を人語に置き換える「聞きなし」ということを行ってきた。このことが、3でふれた戦争の占いへと発展していったのだろうか。占いには内臓や骨なども用いたというが、耳に聞える鳴声が最も強いインパクトを与えたことは想像に難くない。公冶長のはなしも、広くは「聞きなし」の一つに数えられるかもしれない。そして何よりも、鳥は空を飛ぶ。人では得ることが不可能な情報を持っているに違いないのだ。鳥のことばを聞くこと、

鳥が人語を発すること、どちらも地をはう人間にとっては得難い情報に違いない。鳥に関するはなしはこれまで見てきたもの以外にも、洋の東西を問わず数多い。それはやはり鳥が空を飛び、さまざまな音色で鳴くことが根底となっているだろう。これらの物語は、鳥が与えてくれた情報を人間がどのように処理してきたかの軌跡ともいえるだろう。

むすび

小論で取り上げたのは公冶長という一人の人間に仮託されたはなしである。はなしの基本的な骨格は、「鳥語を解することによって獄に繋がれ、やはり鳥語を解することによって身の潔白を証明する」ということであるが、何よりも公冶長という人物の出自が『論語』という古典にあることが、この話の大きな特徴といえるだろう。中国の古典の中には公冶長以外にも鳥語を解する人物はもちろん存在する。[30] しかしそれらは1でも述べたように、どれも断片的なエピソードといった観が強く、公冶長のはなしのように後世により説話的なものに発展していったものはどうやら見られないようだ。一方、孔子の弟子としての公冶長をみてみると、女婿になったとされる人物にしては輪郭がはっきりしていない。それでいながらこれだけ物語性のある逸話を持っている。おそらくそのぼんやりした柔らかい輪郭が、公冶長に行動の自由を与え、古典の世界を抜け出して口承の世界へ越境することを可能にしたのだろう。公冶長のはなしは膨大な古典世界を持つ中国ならではのものという観が強い。仏典や周辺の諸民族を通じて世界とのつながりを持ちながらも、公冶長はやはり中国に生きるはなしの主人公ということができそうだ。

しかし、まだまだ課題は山積している。「中国の特性」という一言で安易に結論づけることは厳に戒めなくてはなら

ないだろう。周辺の諸民族との関係はもとより、インドやアラブ世界、ヨーロッパとの関連も視野に入れた比較検討が求められる。また、鳥あるいは動物と人間との関わりという、より大きな枠組みを視野に入れていくことも必要だろう。この小論をその始めのほんの小さな一歩としたい。

注

(1) その名前からして特異的である。姓が「公冶」で名が「長」だが、公冶という姓はこれ以前もこれ以後もほとんど目にすることはない。異民族としての含みを持たせた名ではないかとも考えられる。公冶長とならんで鳥語を解する人物として知られる、春秋左氏伝に登場する介葛盧については、個人の能力というよりは夷狄の人々の特性として鳥獣の言語を解する能力を持つとする解釈もある（春秋左氏伝・孔穎達疏）。

(2) 原文は『知不足斎叢書』所収『論語義疏』によった。原文は以下のとおり。

「公冶長従衛還魯、行至二堺上、聞鳥相呼往清溪食死人肉。須臾見一老嫗當道而哭、冶長問之、嫗曰、兒前日出行、于今不反、當是已死亡、不知所在。冶長曰、向聞鳥相呼往清溪食肉、恐是嫗兒也。嫗往看、即得其兒也、已死。嫗告村司、村司問嫗従何得知之、嫗曰、見冶長道如此。村官曰、冶長不殺人、何縁知之。因録冶長付獄。主問冶長何以殺人、冶長曰解鳥語、不殺人。主曰、當試之。若必解鳥語、便相放也。若不解、當令償死。駐冶長在獄六十日。卒日有雀子縁獄柵上相呼、嘖嘖喈喈、冶長含笑。吏啓主、冶長笑雀語、是似解鳥語。主教問冶長、雀何道而笑之。冶長曰、雀鳴嘖嘖喈喈、白蓮水邊、有車翻、覆黍粟、牡牛折角、収斂不盡、相呼往啄。獄主未信、遣人往看、果如其言。後又解豬及燕語屢験、於是得放。」

(3) 『論語集釋』巻九（一九九〇・中華書局）。

(4) 『中国神話伝説』（一九八四・中国民間文芸出版社）『中国神話史』（一九八六・上海文芸出版社）。また『神話伝説詞典』（一九八五・上海辞書出版社）でも「公冶長」の項目を立てている。これらの著作では、後出の『留青日札』や『青州府志』にも触れている。

(5) 『諸橋轍次著作集』第七巻（一九七七・大修館書店）所収。

(6) 『論語』（中国古典選3・一九七八・朝日出版社）八頁。

(7) 『海南小記』（定本柳田國男集第一巻）、『桃太郎の誕生』（同第八巻）、『野鳥雑記』（同第二十二巻）で公冶長のことに触れている。

(8) その他に、駱賓王、李白、韓愈、柳宗元の詩に「公冶長」または「冶長猜」という語句が見られる。

(9)「公冶長解禽語免罪」。『白氏六帖事類集』は白居易の撰になる類書。三十巻。成語故実を集めたもの。

(10)『旧雑譬喩経』巻上に、鳥語を解することに関するはなしがある。あらすじは以下のとおり。

昔、龍王の娘が外出して、牛飼いにつかまってしまった。国王がこれを救ったが、娘は偽って国王が自分を縛りあげたと父、龍王に告げた。龍王は国王が善人なのを知っていたので、この話をいぶかり蛇に変じて床下で国王の話を聞き、娘の話は偽りであることを知った。次の日龍王は国王を訪ね、礼をしたいと申し出た。国王の禽獣のことばを解したいという願い出に、七日間潔斎すれば願いはかなうが、このことは決して他人に話してはならないと龍王は告げた。ある日、国王は蚊の夫婦の話に思わず笑うが、后がこれをとがめる。話はもつれ、后はわけを話してくれなければ自殺すると言い出す始末。途方にくれて王宮の外に出た国王を、龍王が羊に変じて諫める。自分が一国の王であることをあらためて悟った国王は后に、自殺するがいい、宮中には他にも女はいると言った。

また、南方熊楠は「牛王の名義と烏の俗信」(全集第二巻、一八九頁)という随筆の中で、烏が不吉な鳥であることを述べている部分で、『経律異相』巻四十四から以下のような部分を引いている。

むかし、一のきわめて貧しき人あり、よく烏語を解す。賈客のために賃担ぎをし、水辺を過ぎて飯くう。烏鳴いて賈客怖るるに、作人反って笑う。家に至って問うていわく、云々。答えていわく、烏さきにわれに語りぬ、賈人の身上によき白珠あり、汝これを殺して珠を取るべし、われはその肉を食らわんと欲す、と。このゆえにわれは笑いしのみ、と。

これは「男庶人部」十六「賃担ぎよく烏語を解すること」という、『譬喩経』から引いたはなしで、この後、なぜ自分を殺さないのかという客の問いに、前世で他人の物を奪ったためにこうして貧しい賃担ぎになってしまった。だから今では死んでもそんなことをする気はないと答えるという筋のはなしである。

同じ『経律異相』の巻四十四「男庶人部」三十七には、「小児が前世で三銭を布施し、今鳥語を解してついに王となること」というはなしが『雑譬喩経』から引いたものとして出ている。次のようなあらすじのはなしである。

昔ある男が三銭を布施して三つの祈願をする。一つは将来王となること、二つは動物のことばを解すること、三つは沢山の知恵を得ることだった。男は死んで、美しい子供に生まれかわり、王の側仕えとなる。ある日燕の巣を見上げて笑っていると、王がその訳をたずねた。燕が龍女の髪

の毛を手にいれたと言っていると答えると、王はその真偽を確かめさせた。真と分かると王はこの龍女が欲しくなり、子供に、鳥語が分かるなら何か方法が分かるはずだから龍女を連れてくるようにと命じる。子供は決死の覚悟で出発し、途中で策をめぐらせて三つの宝（かぶると姿が隠れる帽子、水の上を歩ける靴、死人を再生させる鞭）を得る。ついに龍の国に着き、金塊を与えて龍女を連れ出す。王はこれを聞いて喜び、女一人だけで部屋に入るように命じた。子供は帽子をかぶって密かに女について行った。王が醜いので、女は金塊を投げつけてこれを殺してしまった。子供と女は王座に上り、以後王と皇后となると宣言した。

(11) 田芸蘅は汝成の子。生没年は不詳だが、父は明・嘉靖五（一五二六）年の進士なので、この随筆も嘉靖から万暦頃に成立したと推定できる。

(12) 青州府志は嘉靖・万暦・康熙・咸豊の四回編まれているが、『古今図書集成』は康熙年間の成立なので、ここに引かれているのは嘉靖か万暦のものと考えるのが妥当だろう。

(13) 作者は羅懋登。万暦年間の成立。体裁は百回ものの章回小説で、この部分は第五十二回（一九八五・上海古籍出版社・六六九頁）からのもの。

(14) 『南方熊楠全集』第三巻（一九七一・平凡社）一四四頁。

(15) 『焦氏筆乗』（明・万暦、編者は焦竑）巻一「公冶長」、『韓門綴学』（清・一八世紀中葉、編者は汪師韓）巻一「公冶長解禽語」。

(16) 『呉友如画宝』（一九〇八年、『飛影閣画報』（一八九〇年創刊）より呉友如の作品を抜粋して編まれた。ここで用いたのは、一九八一年上海古籍書店より復刻されたもの）第六集上冊「海国叢談図」に掲載された「学習獣語」は、猿のことばを機械を用いて習得したアメリカ人のことを述べている。ここに動物のことばを解した古代の中国人として、公冶長と『春秋左氏伝』の介葛盧が登場している。

(17) 金洪漢主編『中国民間文学集成　遼寧巻　撫順市巻』上（一九八九・中国民間文学集成遼寧巻撫順市巻編委会）四九〜五〇頁。

(18) 臨汾地区民間文学集成委員会編『堯都故事』第三集（一九八九・内部資料）一四七〜一四八頁。

(19) 徐華龍・呉菊芬編『中国民間風俗伝説』（一九八五・雲南人民出版社）八二一〜八二二頁。

(20) 紹興市民間文学集成辨公室編『浙江省民間文学集成　紹興市故事巻』上（一九八九・中国民間文芸出版社）二四一〜二四二頁。

(21) 前出『浙江省民間文学集成　紹興市故事巻』上、二四二〜二四四頁。

(22) 崔仁鶴『韓国昔話の研究』（一九七六・弘文堂）二五五頁。

(23) 仁晳宰『예날이야기선집（昔話選集）』三（一九七一・ソウル教学社）一二一〜一二九頁。

(24) 孫晉泰『朝鮮民譚集』（一九三〇・郷土研究社）二九七～二九八頁、「三兄弟」。

(25) 「猟人海力布」（『民間文学』一九五六年第六期）三二～三五頁。

(26) 金田鬼一『完訳グリム童話集』一（一九七九・岩波文庫）一八一～一八七頁「白へび」あらすじは以下のとおり。

ある国の王が昼食に人払いをしてあるものを食べている。ある日側近の家来が皿を下げる時、我慢ならずに皿の蓋をとって中をのぞいてしまう。そこには白蛇が一匹入っていた。家来はその蛇を食べてしまう。すると動物のことばが分かるようになる。ちょうどその日、后の指輪がなくなり、この家来に嫌疑がかかる。鴨の話から指輪のありかが判明し、家来は潔白を証明する。王は疑った詫びに家来の願いをかなえてやるという。家来は馬と旅費をもらい旅に出る。旅の途上、家来は魚、蟻、子烏を次々に助ける。そして後にこれらの動物たちの力添えで難題を解き、大きな国のおひめさまと結ばれる。

(27) 十巻七十章（中野定雄ほか訳『プリニウスの博物誌』I、雄山閣・一九八六、四六一頁）。このことに関連して南方熊楠は『十二支考』七「蛇と財宝」で、

かく蛇が匿れた財宝を守るというより転じて、財宝が蛇に化けるとか、蛇の身がきわめて貴い効用を具うるという俗信が生じた。ドイツの古話に、蛇の智慧ある王、一切世間のことを知る。この王昼餐後、必ず人に秘して一物を食うに、その何たるかを識る者なし。その僕これを奇しみ私かにその被いを開くと、皿の上に白蛇あり、一口嘗めるとたちまち雀の語を解しえたので、王の一切智の出所を了ったという。北欧セービュルクの物語に、一僕、銀白蛇の一片を味わうや否や、よく庭上の鶏や、鵝や鷲や鴿や雀が、その城まもなく落つべき由話すを聴き取った、とあり。プリニウス一〇巻七〇章には、ある鳥どもの血を混ぜて生じた蛇を食うた人よく鳥語を暁る、と載す。

と述べている。「ドイツの古話」は、おそらくグリムの「白へび」のことであろう。

(28) インド起源については、柳田國男が「鳥言葉の昔話」で概略にふれている。『昔話と文学』所収（『定本柳田國男集』第六巻・一九六三・筑摩書房、三一四～三二一頁）。これは「放送二題」としてラジオ放送を原稿におこしたものなので、示唆に富んではいるが、残念なことに参考文献等の情報には乏しい。

(29) 中国の鸚哥・鸚鵡については、澤田瑞穂「鶯哥孝行本生」（『中国動物譚』、一九七八・弘文堂、所収）、中野美代子「白い鸚哥」（『仙界とポルノグラフィー』、一九八九・青土社、所収）にくわしい。

(30) 『通俗篇』では鳥語を解した人物として十人を越える人々が列挙されている。また『太平広記』や『広博物志』などにも

散見される。

小論は、『中国民話の会通信』31号（一九九四・一）掲載の研究ノート「公冶長故事について」に基くものである。研究ノート発表後、寺内重夫氏より、入手しにくい中国の内部発行の資料をご提供いただいた。ここに記して謝意を表します。